

1. 守護玉物語

各務原市立稲羽東小学校6年

後藤 舞香 加藤 彩華

↓

敦賀市立沓見小学校5年

松嶋 和花 吉田 啓人

私は、平凡のかたまりみたい。

勉強もそこそこ、運動もまあまあ。そんな私、斉藤美咲十二才が、ある事によって、不思議な世界にまきこまれるなんて、思いもよらないでしょ。

このお話を読んでるキミだけに教えるね。

相変らず平凡な私は、たん生日に、自分あての届け物を見つけたの。

赤と白のチェックのふくろで包装してある……。

プレゼントかな？

私はすぐに自分の部屋で開けた。そうしたら、なんと、赤い真じゅのネックレスが入っている。思わず、

「きれいーい！」

と、さげんでしまった。

すぐに取り出して、つけてみた。鏡でもう一回見てみても、やっぱりきれい。自分をながめていると、

「ぱあー」

すごい勢いで、光が部屋を包みこんでいった。

「な、何なの？」

光は、一分ぐらいで消えた。

そのあいだ私は、幻でも見ているのかと、口をあぐり開けたままでいた。

はっと、我に返った私は、すぐあたりを見回した。全然、変わった所は無かった。

……ある、一つの所を除いては……。

なんととなりには、赤い髪の女の子がいた。背は低いけど、神のようなオーラが出ている。

「初めてお目にかかります。私は……」

私は、頭が混乱していた。

平凡な私は、ずっと平凡な人生を送っていくと思っていたのに。

私はその場で気絶してしまった。

起きたらベットの中にいた。

やっぱり、夢だったのかと思い、みんなが待っている下へおりて行った。けれど、ケーキを食べてもケーキの味がしない。やっぱりあの事が気になる。

だって、ちゃんと私の目でしっかり見だし、今気付いたけど、あの赤い真じゅのネックレス、首につけていたし。このままじゃ、せっかくの楽しいたん生日がむだになっち

やう。

という事で、私の一番の理解者、おじいちゃんに聞いてみた。

そんなの幻だろうと言われるかもしれないけど、ダメもとで。

すると、びっくりする答えが返ってきた。

「それは、しきたりじゃな。斉藤家の」

「へっ？ そのしきたりって、何なの？」

「よく聞くんじゃないよ。斉藤家の者には、男女関わらず、神獣の中の一匹が宿るんじゃないよ。しかも十二才。わしも、あの時は、青龍じゃったかなあ〜。清羅は、元気かのお〜」

「セイリュウ？ セイラ？」

「美咲や、そんな事も知らないのかい？ ほら北玄武・東青龍・西白虎・南朱雀。玄武は蛇、青龍は龍、白虎はトラ、朱雀は鳥。それぞれ、大地・水・風・火があやつられるのじゃよ。ところで、その者の髪の色は、何色じゃったか？」

「赤だけど……。それが、何か？」

「おお、それは、朱雀ではないか。さっき言った、火の鳥じゃよ。仲良くするんじゃないよ」
すると、後ろから声がした。

「そのおじい様の言う通りです」

なんと、そこには、さっきの女の子が立っている。

動けないでいる私をよそに、

「私の名は、杏。さっき言った通り、火をあやつる朱雀の子どもです。年齢は七千才。人間の年で言うと十才ぐらいです。

あなた様は、私のパートナーであり、主人です。あなた様を守護するようにと、上の者から言われました」

「上の者って？」

私は、おじいちゃんにこっそり聞いた。

「神じゃよ。それより、お前も自己紹介！」

「あ、えっ〜と、私は斉藤美咲デス」

「美咲殿でございますか。よろしく申し上げますぞ」

でも、何となくつかれてしまって、その日は、ねてしまった。

杏とのパートナー生活が始まって三日。

私はその日に、杏の力を見る事になる。

それは、その日の昼休みに起きた。

私が、外に出ようとしたら、いきなり、すごいスピードでサッカーボールが飛んできた。

「きゃー！」

私はさげんだ。当たる！ と思った時、

「失礼します！」

と、声がした。

何かが、私に乗り移った気がする。そのしゅん間、

「バァーン」

なんと、私がボールをけり返していた。しかも、すごいスピードで。少し、足が痛かった。すると、近くに……朱雀！

「申しわけございません。遠くにいたもので……。おけがは、ありませんか？」

「だ、大じょうぶだけど……。もしかして、乗り移った？」

「はっ、すみません。今度から、気をつけます」

ペコペコ謝る杏を見て、私は「ぶっ」と、笑って言った。

「気にしないでよ。それより、杏は、すごい力を持ってるのね。もっと見せてよ」

「はう～、なんとありがたきお言葉。では、お望み通りに」

杏は、色々やってくれた。火をあやつるショー。花束や、空飛び雲を出してくれたり、最後には、杏の昔の話もしたりしてくれた。

「そして、私は、神に命を出され、地上におりて行くのです。ん？ 美咲殿、何か？」

私は、にこっと笑って答えた。

「私達、もう友達よね？」

「はい！ 美咲殿」

杏は、はじけるような声で笑った。

杏とのパートナー生活一ヵ月。杏は、地上での散歩が趣味みたい。

ある日、杏が帰って来たら、となりに、ピンクの髪に花かんむりをしている女の子がいた。杏は言った。

「この子、けがをしていたので魔法を使って治したんですけど……。何も分からないみたいで……。どうしましょう」

「つまり、記憶そう失ってコト？ それなら、面どう見てあげなきゃ」

杏は、フルーツを出した。

その子は、桃を食べた。その時、私はひらめいた。

「ねえ、この子の名前、『もも色』にしない？」

杏は、大賛成してくれた。そうして、この子はもも色となった。

それから、もも色は元気に暮らした。記憶も、もどりつつある。

ある日、もも色が好物の桃を食べていた時、すごく明るい緑とピンクの光がもも色からほと走る。よく見ると、もも色の額にある葉の紋章が、光っている。杏が口をふさいだ。

「桃華（とうか）様！ 美咲殿、あの方は、神のむすめです。あの紋章が、神の証なんです！」

もも色は外へかけ出した。

「まって！ もも色！ まって～！」

私がそう言っても、もも色は帰っては来なかった。

私と杏は、ただ、ぼう然とげん関で立っていた。☆

私は「桃華（もも色）」が何者なのか、今いったい何がおこっているのか分からない。杏は私を心配そうに見ている。

「桃華……どこへ行っちゃったんだろう……」

もも色が何者なのかを知るために、私と杏は一番たよりになるおじいちゃんのところへ向かった。

おじいちゃんは不安そうな顔をしてすわっていた。

「おじいちゃん、おじいちゃんなら知ってるでしょ？ 桃華っていう子は神の子なんだよね？ なんでそんな子がここにいたの？ ねえ、おじいちゃん」

「……桃華は神の子で、美咲と杏に伝えることがあったから、神に地上に行けと言われて来たはずなのじゃが、失敗してしまったようだ」

「それで伝えることっていうのは……？」

「実はじゃな、杏の仲間、玄武と青龍と白虎が、天界けいさつ所からにげてきたブラック・バロムにつれさられてしまったのだよ……」

「ええ！ じゃあ、みんなはどこにいるのですか？」

おじいちゃんは、

「美咲と協力して行きなさい」

と言って、地図を書いてくれた。

ブラック・バロムのアジトは天界の反対側にあった。

天界の反対側は、花も草も木もなく、悲しい場所だった。

「美咲殿、本当に大丈夫なのですか？」

「平気。杏こそ！」

私たちは顔を見合わせて笑った。そして、

「行くよ！」

と、真けんな顔をして杏は言った。

杏と私は手をつなぎ、いっしょにブラック・バロムのアジトへ向かった。ブラック・バロムのアジトは真っ黒で、何もキレイなものはなかった。

「ブラック・バロム！ 私の仲間をかえしてください！」

と、杏は力強くさげんだ。

「杏、待って！ 私が戦わずに反省させてみせるから！」

と私は言った。

「……分かった」

杏は賛成してくれた。

「ブラック・バロム！ 出てきて！」

「だれだ！」

「私は仲間をとりかえしにきたのです。仲間を返してください！」

「ふんっ！ そんなかんたんに返すわけにはいかない！」

「なんですって！」

「杏、ちょっと待って！」

しーん。私はブラック・バロムの方へ近づいて行った。

「ねえ、あなたは何をしたいの？ 杏の仲間たちをどうしてつかまえたの……？」

「……私は……優しいあなた達にあこがれていた。牢屋の中からやっとの事にげて、優しい事を教えてもらおうと思っていた。だけど、わるい事しかできない私は、優しくな

ろうと思っけていても、なる事はできなかつた……。本当は、私もあなた達の仲間に入りたかつたな……。すいません。牢屋にもどりますね……」

と、ブラック・バロムは仲間たちを返してくれた。

そして、とほとほと天界の方へ帰って行きそうになつた時、「待つて！」と、杏が止めた。

「あなた、仲間になりたいんでしょ？ あなたが優しい心を持つならね！ みんな、それでいいでしょ？」

みんなはコクリとうなずいた。

「え……いいんですか？」

「うん！ よろしくね！」

杏の仲間が一人増えた。

「よし、じゃあ、みんなで帰ろう！」

私たちは、玄武と青龍と白虎とブラック・バロムを天界へ帰してから、杏と家へ帰ろうとした。

と、その時、

ドンッ！

「きゃあー！」

杏がいきなり私のせなかをおした。

そのとき私は、こわくて気絶してしまつた。

でもその時、確かに聞こえていた。

「さようならー」という杏の声が――。

私が目を覚ますと、私の部屋だつた。

「あれ？ 杏っ！」

と言つても、杏はすがたを現さなかつた。

あれは夢だつたの？ そんなのいやだ！ 私は家中探した。

あのネックレスと杏を……。

けれども、探しても探しても、ネックレスと杏は見つからなかつた。

元々平凡に暮らしていた私は、杏の事が夢だつたとしても、杏に会う前の私なら、なーんだ夢か、で終わってしまうとこだつた。

でも、杏と出会ってから平凡じゃなくなつた。

大変なこともあつた。でも楽しかつた。

そう思つても、杏は帰ってこなかつた……。

杏がいなくなつてから一年。私は今年で十三才になる。

たん生日に自分あてのキラキラしたラメがついた、きれいなにじ色のふくろで包装してあるものが届いた。

「プレゼントかな？」

私はすぐに自分の部屋で開けた。

そうしたらなんと、きれいなにじ色の星がついたネックレスが入っていた。
すぐにとり出して、つけてみた。

「きれいーい」

その時、ぱあーとすごい勢いで光が部屋をつつみこんだ。
そこに現れたのは……。

「ただいま」

杏だった。

あと玄武と青龍と白虎とブラック・バロムもいる。
私はみんなに笑いかけて、「おかえり」と言った。